

2022年12月25日 説教「初めに言があった」青戸教会

高橋克樹牧師

聖書 ヨハネ福音書1章1〜14節

ヨハネ福音書の新共同訳聖書の冒頭の翻訳は「初めに言があった」となっていて、「言葉」の「葉」を取って漢字一字の「言」だけで「ことば」と読ませています。これは原文のロゴスを「言」という一字で表すために敢えて、このように表現したわけです。続いて「言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。」と翻訳されていて、この言が何を指しているか明確ではないのですが、6節以下によると、洗礼者ヨハネはこの言が世を照らす光であることを証しをするために神から遣わされた人物であることが書かれています。そして、14節になって「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた」と書かれています。そこに出会って、それがイエス・キリストであることが想像されるに至るのです。そして、17節で「恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである」という言葉で「言」という漢字一字が神からこの世に遣わされたイエス・キリストであることが明確になるのです。

「初めに言があった」という書き出しは、神が天地創造の業をなしたときに、「光あれ」という言葉を発したこと想起させます。創世記1章1節で「初めに、神は天地を創造された」という書き出しを意識してヨハネ福音書は書き始めていることは明らかです。ただ、ヨハネ福音書は「初めに」創造が起こったのではなく、「言があった」と続けます。つまり、言（ロゴス）は「神が天地を創造する」前から、すでに存在していたと証しするのです。この地上に人として生まれたイエス・キリストは、実は天地が創造される前から先に存在していたお方だということです。それが「初めに言があった」という書き出しが意味していることなのです。1節と2節で「共に」と訳されているプロスという前置詞は、横に並んでいるという意味ではなく、神「に向かつて」という状態を表す前置詞です。ですから、「神と共に」は、イエス・キリストが神に向き合っている人格的な存在だということを表しているのです。つまり、父なる神に対して子なるキリストが相對している、お互いに密接な人格的な関係を取り結んでいるということです。これが「共にあった」という意味なのです。

3節では「万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。」と続きます。万物は初めに神と共にあった言によって造られ、その言と神との密接な愛の交わりの中で、創造の業がなされたのだと言っているのです。天地創造の神は言（ロゴス）を媒介することによってすべてのものを創造されたといっているのです。それは天地創造の業がイエス・キリストの媒介によってなされたことが宣言されているわけで、私たち人間もロゴスであるイエス・キリストによって造られた存在であるということです。これは他の福音書にはないヨハネ福音書独自の解釈ですし、独特な信仰告白です。この世界は、神と神である御子によって創造されて、その御子イエス・キリストの誕生のあとも、この地上で御子イエスが様々な救いの業を成して神のもとに戻られたことで明らかになったように、この世界はすべてが神と御子イエス・キリストによって創造されたあとも、終末である神の業の完成へと向かって導かれているのだということです。

4節「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。」と続く証しによって次のことが明らかになるのです。ロゴスであるキリストの命があつて、この世を照らす光が暗闇を照らす一条の光が射し込むのです。私たち人間は、暗闇の中で中で右往左往しがちであるけれども、この光を自当てに歩いていくことが

できるということです。私たちの世界には戦争があり、私たちの心に憎しみや妬み、悲しみや不満といった暗闇をたとえ抱いていたとしても、そのような世界に神は御子イエス・キリストをお遣わしになって、ロゴスと父なる神の愛の交わりのなかで万物創造の業をなされたように、この世界を愛の交わりの中で終末の完成へと導いておられるのです。

アエラの2月12日号は「言葉の力が人生を動かす」という特集を組んでいました。こちらの「言葉」は「葉」がついている「言葉」で、心を震わせる珠玉（しゆぎよく）一言が人生を動かすという内容です。羽生結弦さんや芸人の太田光（ひかり）さんらの言葉が紹介されていました。いつもいろいろと物議を醸しだす太田光さんが面白いことを言っていました。「どんなに言葉を連ねても、絶対に全部は伝えきれない。何事も簡単にわかりやすく伝えるのがよし、とされる時代である。でも、それでは伝わらないことが多いと太田さんは嘆く。太田は回りくどいってよく言われるんだけど、簡単な言葉では伝えられない。だって、世の中で起きていることって、ほとんどが簡単なことじゃないからね」。そこに言葉のジレンマがある。言葉とは「真実へのヒント」である。たとえば、悲しいと口に出して言った瞬間、それ以外の感情は抜け落ちてしまふ。でも、実際には、悲しさだけで表現される感情なんてないのに。そこで、人は無限ともいえる感情のグラデーションの中で、人に伝えるときはわかりやすい言葉を選ぶことになる。しかし、それは常に真実から少しずれている。だから、言葉をつなぐことで何とか伝えようとして言葉は増えていくんだけど、絶対に全部は伝えきれない。だから言葉はヒントに過ぎない。一つのヒントぐらいに思えば、そんなに言葉に苦しめられることもない」と言っていました。これらの発言は私たち人間の言葉のことです。

しかし、ロゴスとしてのイエス・キリストは神と共に、私たち人間を日々、その愛の霊によって創造されているのです。それは私たち人間が感覚的になかなか実感として感じ取れるものではないのですが、ヨハネ福音書の記者は、言（ロゴス）の内に命があつて、その命は人間を照らす光であると言い切っています。私たちが発する言葉は人を励ますこともできますが、傷つけることもただあります。けれども、恵みと真実へと導くロゴスであるイエス・キリストが放つ光を自当てに歩み通していきたくないと願うものです。